

中島文雄著

日本語の構造

— 英語との対比 —



岩波新書

373



中島文雄著

日本語の構造

— 英語との対比 —

岩波新書

373

中島文雄

1904年東京に生まれる

1927年東京大学文学部卒業

現在一東京大学名誉教授，日本学士院会員

専攻一英語学(英語史，言語理論，英文法)

著書一「英語の構造(上・下)」(岩波新書)

「英語発達史改訂版」(岩波全書)

「意味論」「英語の常識」

「文法の原理」「英語学研究室」

「英文法の体系」「近代英語とその文体」

編書一「岩波英和大辞典」「新コンサイス和英辞典」

「岩波新英和辞典」(共編)

「英語語源小辞典」(共編)

日本語の構造

岩波新書(黄版) 373

1987年5月20日 第1刷発行 ©

定価 480 円

著 者 なか 中 じま 島 ふみ 文 お 雄

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店 会社

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-420373-2

まえがき

拙著『英語の構造』上下(岩波新書, 1980)を出してから、つぎは日本語の構造について書いてみたいと考えていた。

この問題については前から関心があったが、英語学を専攻する私にとっては、国語学者による膨大な研究成果は、孫引き的な知識のほかは、ほとんど未知の世界であった。ただ国語学会編『国語学大辞典』によってその方面の知識を多少なりとも補うことができたと思う。この辞典の前身である『国語学辞典』はその初版(1955)がでたとき購入して随時参照していたが、現在の大辞典は内容・索引とも充実しており、極めて有用であった。そのほか日本言語学会の機関誌『言語研究』や大修館の月刊誌『言語』に発表される日本語関係の諸論文や筑摩書房の『言語生活』などには目を通して、これらの書物や論文から教示をうけたことは言うまでもないが、日本語の構造については自分なりに考えるところが多かった。

日本語と英語とが構造を異にすることは、初めから十分解っているつもりであったが、文の構成素を記号で表し、その構造を定式化することが、日本語については実にむずかしいということを痛感した。英語であると主語をなす名詞句と述語をなす動詞句とが文の基本構造をな

し、動詞が他動詞ならば目的語があとにつづくという型があるので捉えどころがはっきりしているが、本文で述べるように、日本語には英語でいう主語はなく、述語だけで文をなす。述語は動詞だけでなく、形容詞も形容動詞も述語になる。わたしは名詞も「だ」をとって述語になると見て、形容動詞を形容名詞＋「だ」と解釈し、述語として動詞・形容詞・形容名詞＋「だ」・名詞＋「だ」を認めることにした。そしてこれらの語句を用言とよび、述語の中の主要語とする。述語は用言だけでなく、助動詞や終助詞を含むことが多いからである。

述語には副詞的な修飾語句が付きうる。述語はさらに先行する名詞＋格助詞によって拡充される。これも日本語の文型と認めなければならない。すなわち[名詞＋格助詞 述語]という述語句の文もあり、これも副詞類によってさらに修飾される。名詞も修飾語句で拡充される。述語は文の最後にあり、修飾語句は常に被修飾語句の前にくる。文の構成素間の関係は活用語の語尾や格助詞で表され、語順は比較的自由に見えるけれども、必ずしもそうではない。述語文といっても英語の主語にあたるものが表現されないわけではない。この問題は「は」と「が」の用法に関連して扱ってみた。

日本語は分析しにくい言語である。「お出掛けになったのでしょいかしら」は一つの述語文であるが、文法上どう分析するか。語構成論の立場からは細かな要素に分

けられても、統語法の立場からは「お出掛けになる」は一つの動詞と見られよう。助動詞「た」は統語法の単位であろうが、「なる」との結合は密接である。「のでしょう」や「かしら」はどう扱うか。膠着性の日本語の分析は、語形の点でも意味の面でも複雑である。国語学者のあいだでは片付いている問題なのに、知らないで無駄な議論をしているところが多いかも知れないが、『英語の構造』の著者が日本文法を勉強した報告書を、一般の読者諸賢に提出したものとして見ていただきたい。

本書が曲がりなりにも出来上がったのは、岩波書店の坂巻克巳氏の忍耐力と、校正の際に示された熱意と労力に負うところが大きい。謝意を表する次第である。

昭和62年3月

中 島 文 雄

略 語 表

A	adjective(形容詞)	+p+	+particle+(連体助詞)
Adv	adverb(副詞)	+p.	+particle.(終助詞)
Advl	adverbial(副詞類)	-p	-particle(接統助詞)
AN	adjectival noun(形容名詞)	PredHW	predicate headword (用言)
aux	auxiliary verb(助動詞)	PredP	predicate phrase(述語句)
Det	determiner(限定詞)	PredW	predicate word(述語)
MN	manner noun(樣態名詞)	S	sentence(文)
N	noun(名詞)	V	verb(動詞)
n	noun(形式名詞)	v	verb(形式動詞)
p	particle(助詞)	VN	verbal noun(動名詞)
+p	+particle(格助詞)		
+p'	+particle'(副助詞)		

目 次

まえがき

略 語 表

1	日本語と日本文化	1
2	和歌の日本語	8
3	日本文の特質	14
4	日本文の特質(続)	20
5	助詞「が」について	26
6	「が」の用法の歴史的推移	33
7	連体形の終止形吸収	40
8	動詞の活用形について	47
9	活用形とかな遣い	53
10	日本語表現の名詞的性格	60
11	日本語の文構造	67
12	名詞・動詞の拡充	73
13	副 詞 類	79
14	文 構 造 規 則	86
15	連体助詞「の」と準体助詞「の」	92

16	修飾語句＋名詞	100
17	「象は鼻が長い」——副助詞「は」	106
18	「は」と「が」	113
19	助詞の種類——格助詞	123
20	副助詞・接続助詞・終助詞	131
21	形式動詞と形式名詞	140
22	助 動 詞	148
23	動 詞 の 種 類	157
24	日本語動詞の性格——自発・可能・ 受動・尊敬	163
25	授与動詞・待遇表現	172
26	日本語の構造	181
27	日本語と日本人	188

1 日本語と日本文化

西欧文化と日本文化

日本語の表現は英語などの西欧語にくらべると、論理的でないといわれる。もちろん、日本語でも論理的な思考を表現することはできるが、その場合とかく翻訳調になりがちで、読みにくい文章になることが多い。慣用的な日本語の表現形式が英語の表現形式にくらべ、その構造が論理的でないと言うことはできる。

言語と思考の関係については、拙著『文法の原理』(研究社出版, 1949年)の初めの部分に論じてあるので、ここでは立ち入らないが、要するに、言語と思考とは本来別のものではあるが、両者のあいだには密接な関係があり、言語がなければ、高度の思考は不可能である。それで言語の構造が、その言語を話す人の思考を決定するとは言えないけれども、各言語の発達には、その言語を用いる民族の文化が影響しており、その言語の表現形式が文化遺産であり、それを話す人びとの発想法に影響しているということは十分に考えられる。

西欧語の代表として英語を取り上げ日本語と対照してみると、両者のあいだに大きな発想法のちがいが見られる。英語の背景をなす文化は西欧文化であり、それは古

代ギリシアの理性主義を受け継いでいる。古代ギリシアにおいては弁証法が発達し、論理的な思考や雄弁術が練磨された。この風はローマ時代から中世を経て今日に及んでいる。中世の学芸の中心は文法・修辞学・論理学であり、カトリック教会も大学もラテン語を用い、国際的な性格をもっていた。また英国は議会政治を発達させた国であるが、これには弁論が大きな役割を果たしてきた。演説によって人を説得しなければならないからである。アメリカも民主主義の国で弁論の重要なことはもちろん、個人主義の発達した国であり、多民族国家であるから、自己主張するのに言葉を大いに用いる。彼らは自分の気持ちは口に出して言わなければ相手に分からないと思っている。

これに反して日本は、ほとんど同一民族・同一文化・同一言語の国で、敗戦直後アメリカ軍に占領された数年間を除き、民族として外国人に接触することも少なく、極東の島国の閉ざされた社会で暮らしてきた。意思の疎通に多弁を必要とせず、「以心伝心」とか「腹芸」の可能な社会をつくってきた。自己主張をするよりも、人との和を大切にする。恩情主義の行きわたった社会で自己主張を必要とせず、またそうすることは身分社会の秩序をみだすものとして嫌がられた。戦後この風は大分変わってきたが、日本語はまだ、議論をする言葉として洗練をうけていない。日本人にとって話し言葉は日常生活上

の会話にすぎず、西欧的な「対話」というものを知らない。現在の民主的な社会においても、議会では無益な質問と応答があるだけで、真にかみ合った論戦は行われず、一般に会議といえは時間ばかりかかって結論ははっきりしないことが多い。弁証法的に議論を進めることを知らないからである。

このような文化を背景とする日本語は、どういう発達をしてきたかという、上代(奈良時代)の万葉集、中古(平安時代)の古今集や源氏物語や枕草子、中世(鎌倉・室町時代)の平家物語や徒然草、近世(江戸時代)の俳句など、和歌・物語・随筆などの言葉として洗練されてきた。情緒的表現には優れても、論理的構成には弱いところがある。

主語中心の「命題文」、述語中心の「描写文」

日本文の例として川端康成の「雪国」(1947)の書き出しのところを引用する。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。」

これは三つの文から成っている。それぞれ「た」という完了の助動詞の終止形で終わっているから、独立の文とみられる。第一の文から見ていくと、これには主語がない。日本語には主語がないと言われるが、まさにそういう文である。トンネルを抜けたのは汽車であろうが、そ

れは表出されていない。意味上は当然汽車が考えられるが、状況からそれと分かるものは表出しないのが日本語の特徴である。またトンネルを抜けると汽車は雪国に入っていたというところが、ただ「雪国であった」とある。ここにも主語はないが、意味は明瞭である。次の文の「夜の底が」、最後の文の「汽車が」は主語のようにとれるが、英語の主語とはちがう。「が」については後でくわしく述べるが、とにかくこれらの文は英語の表現法と非常にちがう。E. G. Seidensticker 訳の *Snow Country* では、汽車を主語にして次のようになっている。

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal spot.

この英文からみても明らかなように、英語の文は題目としての主語と、それについて陳述をする述語とから成り、命題文の構造をとるのが基本形式である。そして主語は動作主、述語はその動作を表し、他動詞ならばそのあとに動作をうける被動者がくるという「動作主—動作—被動者」なる構造をもつ。上の英文を直訳的に日本語にもどすと、「汽車は長いトンネルを出て雪国へ入った。地面は夜空のもと白く横たわっていた。汽車は信号所で止まった。」となる。原文と比較すると、もとの和文には一つも「は」は用いられていない。「は」と「が」の差異については別に論じる。

英語の例をもう少し加えると、

1. Clouds hid the moon.
2. His success pleased me.
3. The heat makes me feel languid.

まず直訳すると、1. 「雲は月を隠した」、2. 「彼の成功は私を喜ばせた」、3. 「暑さは私をだるく感じさせる」。

英語では無生物でも抽象名詞でも主語にされ、動作主であるかのように扱われる。これは本来の日本語にはない表現方法である。上の訳文を日本語らしい表現にすれば、1. 「月が雲に隠れた」、2. 「彼が成功したので嬉しかった」、3. 「暑いのでだるい」とでもなろう。これは英語と全くちがう構文である。

日本語では、散文でも和歌と同じように具体的な場面や感情に即した表現法をとり、英語のように、題目となる主語を立て、主語が全文を支配するという表現をとらない。「雪国」の冒頭の文について、汽車という主語が表出されていないと述べたが、実は汽車は問題にされておらず、ただトンネルを出ると景色が変わったことを描写しているのである。はじめから主語は考えられていないのである。英語は主語中心の構造をとり、日本語は述語中心の構造をとることができる。

当然主語があってよいところでも述語だけで済ましている文もある。漱石の「虞美人草」で、初めて女主人公を紹介する文を引用する。

「紅を弥生に包む昼たけなわなるに、春を^{ぬき}抽んずる
紫の濃き一点を、^{あめつち}天地の眠れるなかに、鮮やかに^{した}滴
たらしたるが如き女である。」

むずかしい修飾語句がながながと付いているが、要するに「……の如き女である」というだけの述語文である。もちろん意味の上では「これから紹介する女主人公は」という主題があるのであるが、それは表出されず、ただその人の描写だけで文をなすことができるのが日本語である。英語のように主語と述語からなる文を「命題文」とよべば、日本語のような述語だけの文を「描写文」とよぶことができる。英語では主語が文の主要語で文頭にたち、日本語では述語が主要語で文末にくる。

四種類の述語文

日本語の基本的な述語文として、次の四種類の文を区別することができる。

1. 動詞文：「(もう)寝る(よ)」。「もう」は副詞、「よ」は終助詞で付加的な語である。さらに名詞＋格助詞が加わって述語句の文ができる。以下の文についても同じ。
2. 形容詞文：「(ずいぶん)寒い(ね)」
3. 形容名詞文：「静かだ(ね)」。「静かだ」は普通「形容動詞」とされるが、私はこれを形容名詞「静か」に形式動詞「だ」の付いたものと解し、次の名詞文と同

類のものとして扱うことにする。「静かだね」は男性語、女性語では「だ」がおちて「静かね」。

4. 名詞文：「雨だ／また雨か」。3と同じように形式動詞「だ」を伴って文をなすが、「雨か」のように直接、終助詞をとったり、名詞止めの文をなすこともある。「ふろ！ めし！」など、状況と語調で文であることがわかる。

以上はもっとも基本的な文型であるが、これが名詞＋格助詞で拡充された文型もあり、それも基本的なものと認めなければならない。順次考えていきたい。

2 和歌の日本語

緩やかな文法

日本語の特質は和歌によく現れているといえる。わずか 31 文字という短い詩形のなかで、すぐれた叙情や叙景を行っている。これには詞書ことばがきなどがついて、詠歌の前提となった状況が説明されたりするが、それにしても和歌は、同一の文化を享受し生活感情をひとしくする日本人のあいだでこそ可能になった詩形であるといえよう。

最初に、古今集に収められている阿倍仲麻呂(8世紀)の有名な歌を引用する。

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし
月かも」(古今 406)

これには左注があって、この歌の詠まれた背景が述べられているが、それがなくても我々には仲麻呂の望郷の念がよくわかる。しかしその内容を英語で言ってみようとする、いかにこれが省略的表現であるか思い知らされる。まず「天の原ふりさけ見れば」であるが、これは条件を表すのではなく、前章の「トンネルを抜けると」と同じように、ただ事柄の継起を示すものであるから、これを分詞構文にして Looking up to the vast expanse of heaven とする。すると英語としてはどうしても、この